

補 説

台湾の1990年代を考えるために

三木直大

林中力論説は、本文の注にもあるように台湾現代詩をめぐるシンポジウムでの報告をもとにしたものである。林中力氏は台湾現代詩研究者で、現在は国立台湾師範大学台湾語文学系副教授。法政大学に留学して荒地派を中心とした日本戦後詩研究で修士号、国立成功大学で博士号を取得している。本文で紹介されている羅青や孟樊の「後現代（ポストモダン）詩」をめぐる論稿は台湾で現代詩史を論じるときしばしば言及されるものだが、林氏が「後現代」と「後現代主義（ポストモダニズム）」を区分してとらえていることに注目しておきたい。「後現代」とは歴史画期や時代状況との関連のなかで、「後現代主義」とは「現代主義（モダニズム）」という思想や文学の潮流との関連のなかで、一義的には使用される用語である。

漢語で「後現代」という用語は、1987年の戒厳令解除以降の台湾の文化状況、とりわけ1990年代を考えるときの基本的なキーワードとして、台湾の文化論述に頻繁に登場する。そこではしばしば「多元化」という用語も使用される。もちろん、「ポストモダン」という語をどう規定するかはある。漢語の「現代」は、日本語に翻訳するなら一般的には「近代」である。1980年代中国の開放改革政策下で鄧小平は「四个現代化」という用語を用いるが、これも「四つの近代化」と訳したほうがわかりやすい議論になる。中国人民共和国の歴史区分ではアヘン戦争以降を「近代」、1919年の五四運動以降を「現代」、1949年の中華人民共和国成立以降を「当代」、さらに現在を「同時期」という区分を用いることが多い。一方の台湾では1945年10月の「光復節」を台湾現代史の基点とする歴史画期が、国民党専制政治下でななくなされてきた。しかし、現在では日本植民地統治期を「植民地現代」という用語で論じることがしばしばなされる。周婉窈『台湾歴史図説（増訂本）』¹や何義麟

『台湾現代史』²などはその立場に立つと同時に、1987年以降を「後植民（ポストコロニアル）」時期と画期する。

「近代」や「現代」をはじめ歴史画期を表す用語の厳密な概念規定は難しく、現在の日本では年代による時代区分が歴史記述の主流であるが、台湾でもそれは同じである。ただ概括的な規定をするなら、「モダン」は国民国家の成立及びそれと一体となった国内外の植民地主義の連鎖と不可分のものである。そして中国や台湾では1980年代以降になって、「後現代」という用語が使われるようになる。中国では文化大革命後の80年代民主化の推進、台湾でも同じように1987年の戒厳令解除と前後しての民主化の大きなうねりがあった。だが、「後現代」という語が流通しはじめたときにあった個人の尊厳と思想の自由と民主の含意は、中国では1989年の天安門事件によって変容してしまう。「後現代」は中国グローバリズム下での「近代の超越論」と結びつくことにもなれば、「後現代主義文学」は望むと望まざるとに関わらず相対主義の陥穽に嵌ってしまうことになる。そのこともあって、現在の中国の文学史では1990年代以降を叙述するのに、「主流／非主流」や「中心／周縁」といった操作概念を用いることが多い³。

しかし台湾では、「後現代」という用語は1990年代に入ると、「族群」という語と競い合うようにして、より社会に浸透していく。実態として国民党専制統治下にあったとはいえ台湾では1970年代後半以降、中国とは違って蒋介石死後の中華民国台湾化路線下で徐々に自由化がすすんでいた。文化面では「郷土文学」が豊かな成果をあげ、1980年前後からはポストコロニアル理論を中心に西欧文化理論の受容と適用が活発になる。さらに文化界ではフーコー、デリダ、リオタールなどの受容を背景とした文化論論述だけでなく、グラムシやアルチュセールなどマルクス主義の系譜に位置する論述が盛んに発表されるようになる。「後現代主義の台湾における隆盛は、1980年代の台湾経済発展と、しかしその一方で周辺化という国際的位置、及び1979年の美麗島事件が促した反政府運動と本土化運動と結びついている。メディアと出版業がそれをさらに拡大し、“翻訳後現代”は多くの連鎖する課題と反響を引き起こした」⁴と、鄭慧如は指摘する。ここでの「翻訳」とはベンヤミン翻訳論における「翻訳可能性」——異なった言語コードへの読み替えある

いは再創造の意味だが、きわめて妥当な指摘と言うべきだろう。そして、その主要な舞台のひとつに、雑誌『島嶼邊緣』がある。

『島嶼邊緣』は同人的な読書会が出発点となった雑誌で、当時台湾大学病院に席を置いていた精神科医の王浩威を発行人として、1991年10月に創刊（出版は唐山出版社）。1995年9月に第14号を出して停刊している。1987年の戒嚴令解除によって外省人知識人たちは政治文化的マジョリティの位置から脱落するが、それは台湾の民主化・自由化の当然の帰結であり、外省人は若い世代を中心にそれを受け入れることになる。だが、彼らにとって次に問題になったのは、台湾ナショナリズムの政治的高揚である。そのなかで台湾社会では「族群」の再発見／再構築の言説が盛んになる。それと向かいあいながら、彼らは台湾社会の根底に広がるマイノリティ問題に目を向けはじめる。『島嶼邊緣』は、1990年代のこうした政治状況下で、「族群」を跨いで刊行された雑誌である。その課題はジェンダー差別、セクシュアルマイノリティ差別、原住民差別、労働者差別、移民労働者差別、障害者差別など多様であり、執筆者たちは台湾ナショナリズムの高まりのなかで等閑視されてしまいがちな台湾社会の抱える諸問題を顕在化させていく。また、この雑誌には文化理論的な論文や批評、社会学的な論説や政治批判、社会批評だけでなく、他誌が掲載を拒否したという陳克華の詩篇「肛交之必要」（3期）のほか、鴻鴻の詩篇「吊橋—兼致九〇年代台北的一羣安那其青年」（7期）や陳雪の小説「尋找天使遺失的翅膀」（10期）など実験的かつメッセージ性にあふれた作品が掲載されている⁵。こうした作品は、誌上で展開される社会批判や文化批評の作品による展開と位置づけることもできる。

台湾で「後現代」という用語の使用をひろめた一人に陳芳明がいる。その代表的著作である『台湾新文学史』⁶では、1980年代以降の文化状況を論述するにあたって「後殖民」と「後現代」が多層的に使用される。エドワード・サイードのポストコロニアル理論はもちろんとして、彼の著作にはフレドリック・ジェイムソンの影響が色濃い⁷。ジェイムソンは、中国語圏では1985年の北京大学にはじまり、台湾でも授業や講演をおこなっていて、雑誌『當代』1987年6期にジェイムソンの台湾での講演「後現代主義與文化理論」が掲載されたのにはじまり、多くの著作が翻訳出版されている。ジェイムソ

ンはマルクス主義者として本質的にはポストモダニズム批判の立場に立っているのだが、台湾での受容は戒嚴令解除後の二重の「後植民」状況の議論と不可分のものである。ジェイムソンは、「ポストモダニズム」を後期資本主義の産物とし、その理念である多元的価値を相対主義の陥穽を導くものとして批判する。また、「ポストモダン」を後期資本主義の論理からとらえて、グローバル資本主義を内実とするものとしてポストモダン言説批判を展開する。

台湾で「後現代」を用いるとき、文化論的には植民地主義と表裏となった国民国家の制度を批判することが含意される。台湾では、90年代のポストモダン言説には二重の政権批判的側面がある。まずは国民党専制政治の終焉後の文化状況を象徴するものとしての多元的価値の主張として、もうひとつは李登輝の「新台湾人」言説や当時の民進党を中心とする「族群民族主義」への批判的視点としてである。もちろん戦後国民党独裁政権下の台湾が国民国家であったのかという戦後再植民地化論も、そこに存在する。つまり台湾において「後現代」は「二重の植民地化」と、その「後植民主義」にきわめて密接に通底している。であるがゆえにポストモダン言説は、政治的にならざるをえない。そして2000年代になりグローバル資本主義が席卷するようになると、その「後現代」や「後現代主義」言説への反省や懐疑が登場するようになり、その後の「後現代」をめぐる議論は様々な各論の方向に移行していくことになるが、こうしたことから1990年代以降の台湾の文化状況を考えるとき、「後現代」は現在もなお参照すべき有効な操作概念のひとつなのである。

注

1 周婉窈『臺灣歴史圖説』、聯経出版、2009。翻訳に濱島敦俊監訳『図説台湾の歴史』（平凡社、2007）。

2 何義麟『台湾現代史一二・二八事件をめぐる歴史の再記憶一』、平凡社、2014。同書は著者の日本語による出版である。

3 たとえば、洪子誠『中国当代文学史（修訂版）』（北京大学出版社、2007）など。同書の翻訳に岩佐昌暉・間ふさ子編訳『中国当代文学史』（東方書店、2013）がある。

4 鄭慧如「台湾当代詩的後現代理論輪郭」、『江漢學術』第32卷第2期 2013。

5 『島嶼邊縁』は第10期に「酷兒（Queer）」特集を組んでいる。この特集

号と台湾におけるセクシュアルマイノリティをめぐる問題については、『台湾女性史入門』「VI-6 クィア文学」（台湾女性史入門編集委員会編、人文書院、2008）に紹介がある。

⁶ 陳芳明『台湾新文學史』、聯經出版社、2011。翻訳に下村作次郎・野間信幸・三木直大・垂水千恵・池上貞子訳『台湾新文学史（上）（下）』（東方書店、2015）。

⁷ サイドの影響について陳芳明は、たとえば『後殖民台湾—文学史論及其周邊』（麥田、2002）の「自序」で自ら語っている。また、ジェイムソンについては『很慢的果子—閱讀與文学批評』（麥田、2015）の「第18章：詹明信與後現代主義文化」などを参照のこと。詹明信はジェイムソンの中国語訳名。陳芳明のポストコロニアル研究については、張原銘「台湾におけるポストコロニアル文化研究—陳芳明の『後殖民台湾』を読む」（『フォーラム現代社会学』第3号、関西社会学会、2004）がある。